第502号 昭和62年4月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

1987年（昭和62年）
4月号（No. 502）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

三国合同登山議定書調印式を終えて　今西寿雄……（1）
海外の山……（2）
「山の底」
自然保護
知床森林問題の賢明な解決を　八木健三……（2）
図書紹介……（3）
「高尾山」
東西南北……（4）
「日本列島縦断徒歩の旅」「木暮理太郎翁碑前懇親会の報告と予告」「石井鶴三展開催」
報告……（5）
熊本支部，北海道支部，京都支部，山岳博物館を考える会，集会委員会
垂井町にあった播淫上人名号軸　石坂久忠……（6）
会務報告・ルーム日誌他……（9）（10）
お知らせ……（10）
カット／牧　潤一・山本朋三郎

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日　13時～20時

三国合同登山議定書調印式を終えて

今西壽雄

チョモランマ／サガルマタ　日本・中国・ネパール三国合同登山は日本山岳会理事会の合議を経て、昨年五月からその企画が始まった。

カトマンズ・香港でそれぞれ一回、北京・東京でそれぞれ二回、都合六回の打合せが三国間で行なわれた。いろいろと検討を重ねた結果、最終的に本年一月末の東京会談において、その本筋が概ね合意された。

中国としては国家としての事業であり、また山自体の存在する国でもあるので、調印の場所は北京で行なうのが適切であると当初から提案してあったので、去る二月二十四日北京の人民大会堂において、三国合同登山議定書の調印が行なわれ、引続いて楊徳志登山協会名誉会長の招待による百数十名の調印祝賀会がもたれた。調印にいたるまで十ヵ月を要したことになる。三ヵ国が揃って会合するというのはそれぞれ国情が違うので仲々時間のかかるものである。

調印式の日本側出席者は桜内義雄総顧問、日本山岳会からは私の他三人、読売側からは小林与三次読売新聞社長、高木盛久日本テレビ社長並びにその関係者である。中江要介日本大使も同席頂いた。

中国側は李夢華体育相、人民解放軍総参謀長でもある楊徳志中国登山委員会名誉主席、史占春主席、許競常務副主席、王鳳桐秘書長ほかである。

ネパール側はパンディ・ネパール王国観光・労働・厚生大臣、ネパール登山協会会長カドカ殿下、ポカレル副会長、シャルマ総務主席ほか、三国で総数四十六名参加された。

前日の二十三日に北京の空港に到着して、黄中体操会副会長（大臣クラス）、史占春主席など多数の出迎えを受けた。同日夕刻は中江要介日本大使の招待宴に招かれ歓談することができた。

二十四日の当日は桜内総顧問、小林社長、高木社長とともに呉学謙外相を表敬訪問した。また調印式後、万里副総理との会見があったが、同氏は三国合同登山の意義、科学の優れた日本を強調された。

三国合同登山の内容については大塚博美実行委員長が会報「山」の四九八号に書いているので参照して頂きたい。

いずれにしても、この登山を安全に南北両側から三国協同して交差して、しかもこれを同時にテレビ放映することは全く容易なことではない。あらゆる場合を想定して気象観測、酸素を有効に合理的に使用することなどを考えてみると、三国登山隊員のチーム・ワーク、協力こそ成功の第一要素である。「われこそは」ではなくて、隊員には「下積みの仕事を喜んでできる心」をもってもらわねばならない。昔の姿にもどった登山がどうしても必要となってくる。日本山岳会の精鋭をよりすぐって成功したいものと考えている。

＊

〔議定書調印祝賀会　今西会長挨拶文〕

尊敬する楊得志先生。

中国登山協会、ネパール登山協会ならびにご列席の皆様。

議定書調印が友好のうちに行なわれ、いま私は慶びの気持ととも

お知らせ電話 234六六五九

に、これからの困難を乗越えるための緊張に厳粛な思いです。

今回の登山は、日本と中国とネパールの三国から選ばれた隊員が一つのパーティを組み、世界最高峰の両側から同時に登頂し縦走しようという世界の登山界で初めての試みであり、それにテレビの生中継を加え、夢とロマンにあふれています。

それだけにこの登山の実施には、多くの困難があり、厳しい登山が予想されます。

異なる歴史、異なる文化、異なる伝統を持つ三国の隊員が、言葉の壁を越えて一致協力し、一つの心にならなければ、この登山を成功させることは出来ません。

一方、私たち三国の国民は、同じアジアの民族として多くの共通の文化も持っています。

三ヵ月にわたって一緒に生活しながら一つの目的のために協力することにより、隊員たちは、民族の間に通い合う心が実は昔から脈々と伝わってきているものであることを発見するだろうと思います。

私たちはヒマラヤの大きな自然を愛し、その美しさを守りながら、世界の最高峰を越えて流れる心のつながりを、さらに豊かにするような登山をしたいと願っています。

いま私たちは、遥かなるチョモランマ／サガルマタの頂を目指しスタートラインに立ちました。皆様のご支援とご協力を心からお願い申し上げます。

自然保護

知床森林問題の賢明な解決を

八木健三

昨年夏から全国的な規模で論争がまきおこった知床国立公園内の森林伐採問題も、「本年二月まで野生動物の調査を行ない、その結果をふまえて対応をきめる」という加藤農林水産大臣の発言で、いまのところ凍結期間に入っている。その線にそって一月に二～三日間伐採予定地にシマフクロウやクマゲラなどの営巣木があるかどうかの調査が行なわれた。さらに二月にももう一度調査を重ね、その結果を見て伐採か否かを決めるという方針を林野庁はとっている。再び自然保護団体との間に激しい攻防が展開される日も遠くはあるまい。そこでこの問題について、つねづね考えていることをのべて、この困難な問題の賢明な解決を図りたい。

林野庁が今度計画しているのは、知床国立公園内の国有林一七〇〇ヘクタールを六十一年度から十年間にわたって伐採するというもので、その地域は国立公園の線引きでいうと、問題がなければ三〇％の択伐のできる第二種特別地域と、とくに施業制限のない第三種特別地域からなっている。また林野庁は今回の伐採は一ヘクタールあたり五本くらいの択伐で、ヘリコプター集材をするので林道をつける必要はなく、また老齢過熟の木のみを切るのだから、これは森林の若返りによって活力のあふれたものになるという。

なるほど第二、三種地域だから、法律的には伐採は可能だ。しかし知床国立公園の特色を考慮することが肝要だ。知床半島のこのあたりは、エゾマツ、トドマツなどが、ミズナラ、センノキなどと共存する汎針広混交林帯に属し、世界的に見ても貴重な混交林の特徴をもつ上に、さらにシマフクロウやオジロワシ、クマゲラなどの天然記念物の棲息地でもある。たしかにこの辺りは戦前、戦後に伐採されたこともあり、その意味では純粋な原始林とはいえないが、その後の回復もあってきわめて原始性の高い森林で、しかもそこは前記の天然記念物をはじめ、ヒグマを頂点とする見事な生態系が辛

海外の山

山の底

エヴェレストよりK2の方が高いかもしれない、という記事が三月七日付けのニューヨーク・タイムズその他の米紙に掲載された。世界一の高峰が入れ替わるとしたら、無視出来ないトピックスなので日本や、フランスの新聞も一斉にこれを伝えた。

昨年夏、K2に挑戦したワシントン大学隊（登れなかった）に同行した天文学の教授が、現地での測量とその後入手したデータの分析から前日の六日、この新たな仮説を発表した。教授は、計測器を標高四千㍍のベース・キャンプまで上げ、米海軍の航法衛星へ信号を発信するようにして下山、その結果、K2の高さは控え目に見ても八八五九㍍と測定されたという。

もちろん、同じ方法でエヴェレストの方も計測しない限りどっちが高いとは言えない、と教授は慎重だが、別な計算では「八九〇九㍍」という数字も出たそうだ。

計測方法の違いと言えばその通りなのだろうが、なにしろ世界一、二の高峰の話だ。二百㍍以上高かったはずのエヴェレストが、逆に十一㍍もK2より低かったなんて聞いたらびっくりする。

インド測量局に二十五年間も勤務した経験をもつ英オックスフォード大地理学教授のメイスンは著書「ヒマラヤ」の中に『ヒマラヤの高度決定について』という文書を残している。それによるとヒマラヤの山の高度は、いわゆる三角測量によって決められてきたが、地球の曲率、観測線をまげる地上屈折、地殻の構成物が一様でないことに原因する鉛直線偏差などの面倒な問題があり、実際には多くの修正が必要であるという。

そして、それらの問題が解決された場合でも、高度測定の基礎となる基準面（一般に平均海面と呼ばれているもの）が一体どこにあるのかが、さらに問題になる。「地球の形体、すなわちジオイド（表面を全部平均海面とみなした地球の形）は本当の回転楕円体ではなく、平均海面は回転楕円体の表面ではない。そしてわれわれはグレイト・ヒマラヤの、ある特定の山の下のどこにそれがあるのか正確には知らない。別の言葉で言えば、われわれは山頂を観測することができるが、その底（海抜高度ゼロのところ）を観測することはできない。」

メイスンのこの言葉は、今回のワシントン大学隊の発表内容にも関連すると思われる。つまり、「山の底」とはどこなのか、という素朴な疑問を宇宙時代の測量法があらためて持ち出したように見えるのである。

日本では、水準原点なるものが決められていて、それは「東京都千代田区永田町一丁目一番地」の国会議事堂前公園にある。正しくは、ここの標高は「二四・四一四〇㍍」だが、ともかくこのポイントを基準に各地の高度が決定されるわけだ。国道には二㌔ごとにこれをもとにした水準点が設定されている。

一時は「九〇四一㍍」のとてつもない高度を与えられたあのアムネマチン（実際には六二八二㍍に落ち着いた）など、高峰の高さをめぐる話題は尽きない。正確な水準点を決め、充分科学的な計測をやっているはずの日本でも北アの盟主、剣岳の高度が三〇〇三㍍から二九九八㍍にダウン、剣ファンを泣かせたのはまだ最近のことである。

私達は高さにこだわる動物だ。エヴェレストが世界一でなくなったら、歴史はちょっと困る。

（江本嘉伸）

海外の山

ろうじて保存された北海道に残された最後の自然の秘境である。

林野庁の本年度の計画では知床横断道路の西側の一八〇ヘクタールから、主にミズナラ、センノキ、それにイチイの大径木を八四四本択伐するとしている。ここでその予定地に入ってみると、大木でも曲りくねったミズナラには赤いテープ（伐採の印）を巻いておらず、太くてスーッと伸びたミズナラにはテープがまかれている。ときには三、四〇メートル四方に三本もふくまれていることがある。どう見ても森林の活性化を図るとは考えられず、収入をあげることに目標がおかれているのは明らかだ。

しかも林業の専門家の中にも、伐採後の森林管理を考えると、林道をつけた方がよいという指摘もあり、ヘリコプターを用いるのは一見、自然を破壊しないように見えるが、実は収益をあげるための手段とも見られている。

それではこのようにミズナラやセンノキの良木ばかりを伐採してどのくらいの収入になるかというと、収入は約一億三千万円、ヘリコプターなどの作業経費が約六千万円で、差し引き約七千万円が収益になるというのだ。こんな大騒ぎをして切ったとしても、僅か七千万円の収入とは涙のこぼれるような話である。

わずか一七〇〇ヘクタールの森林にこだわり、年間七千万円の収益をあげるために、これほど強い世論の反撃をうけ、その対応に大きなエネルギーを使うのは全く無駄なことだ。林野庁は森林を木材の生産価値によって評価することをやめ、大胆な発想の転換を行なってはどうか。森林には驚くほど水を涵養する能力のあることが、最近北大の東三郎教授によって明らかにされたが、ダム造成のために建設省に回るべき予算を林野庁に入れる。また森林のもつ防災的な機能、環境保全の機能等々を正当に評価し、国土防衛の意味から森林管理に必要な経費は国防費の一部をさいてこれにあてる。このような改革を試みてはどうか。

いまのように国有林の独立採算制にこだわって、森林の伐採で収益を増し、人員整理と作業の手抜きによって支出の減少を計っても、自然破壊の汚名をうけるだけである。臨調行政改革路線の中曽根内閣のもとでは、民間活力の導入で林野庁が解体させられる恐れさえでてくる。もちろん林野庁だけの努力でこのような改革はできないが、知床の問題でも国民の世論と歩調を合せれば、もっと違った解決の道が開けてくると思う。

今度の問題で環境庁は既に昨年三月の段階で林野庁に対し伐採容認の意向を表明していたため、そ

本年度伐採予定地に立つ、神木と呼ばれる大木にはないが、脇のミズナラには伐採予定の赤テープが巻いてある。

山をきれいに ゴミは持ち帰ろう

図書紹介

高尾山

身近な自然を考える

アサヒタウンズ編

山腹にトンネルを貫く圏央道計画にゆれる高尾山の四季、生活、自然を集大成した本が一月に発刊された。

東京多摩地区に発行されている週刊新聞アサヒタウンズに六十年夏から五十回に互って連載された「東京の山　高尾山」を取り纒めたもので、当会の今西寿雄会長が本書の腰巻に推薦文を書いているので、了解を得て原文のまま紹介する。『高尾山は東京都民や周辺の県民が、生活に潤いを求めて年間に二五〇万人も登山する。全国的に知名度のある山ではないが、明治の森・高尾国定公園で東海自然歩道の起点といえば通りがよい。

この山は修験の道場であると同時に八王子あたりでは昔から人と自然が調和して生きてきた歴史がある。近年、時代の流れとはいえ、便利さを求めて開発が進む。〝圏央道〟トンネルの計画はその最たるものだ。

本書は、都民にとってかけがえのない自然を守り、豊かな山を後世へ残すため、現代を生きる我々が考えなければならないことを教えてくれる』

本書の紹介としては、会長の推薦文に尽きているが、蛇足を加えるならば、第一章　高尾の四季と生活、第二章　危機に瀕する高尾山、第三章　高尾山と私（エッセイ）で構成されており、とくに第二章では六十一年七月に国と東京都が公示した「環境影響評価案」と、反対の立場から近くまとめられる「裏高尾圏央道反対同盟自主アセスメント」の対比が興味深い。

高尾山周辺では、すでに中央高速道が建設され、小仏トンネルや、裏高尾の山の斜面を削った残土約一〇〇万立方米は、小仏の沢と小下沢に捨てられ、水源を暗きょに閉じ込められた自然破壊を経験しているが、圏央道トンネル計画では、少くとも四〇〇万立方米の残土が出る見込みで、建設側のアセスでは、この残土処理の具体策が示されていない―という反対派の指摘は重要である。

一九八七年一月三十日　（株）朝日ソノラマ社発行　B5版二九五ページ　定価一〇〇〇円

（関塚貞亨）

の後この問題に対してはひたすら沈黙を守ってきており、われわれの伐採禁止の要望に対しても、自然保護局長の答弁などもきわめて消極的なものだった。したがって稲村環境庁長官が伐採慎重論をとなえ、知床の現地を見て、加藤農林水産大臣に対し、伐採凍結を申入れたのは、かなり評価されるべきものである。

とはいえ、環境庁自身もっと国立公園にカネを出すべきである。一九六九年の国際自然保護連合の提案では、「各国の国立公園に対し、面積四千ヘクタールにつきレンジャー一人、一ヘクタールにつき管理費百ドルとする」という規準が出されている。これだと知床だけでレンジャー十人（現在は一人）、管理費は六億円となる。このようになっていれば、知床問題など起らなかっただろう。

私はこう考える。森林の公益機能を重視し、国有林の維持管理のための費用は一般会計から支出する。したがって国立公園内の森林はすべて禁伐として、その保護につとめる。第一、二、三種保護地域の区分は廃止され、全部が特別保護地域となるのである。

また今回行なわれつつある林野庁の野生動物調査もシマフクロウの営巣木と鳴き声の確認に限定しているのは、問題をシマフクロウの生息だけに矮小化している。いるかいないかだけなら短期間で分かるだろうが、調査の基本は生物の生息環境の正確な評価にあるべきだ。その意味で今度北大環境科学科の伊藤浩司教授を代表者とする「知床半島　生態系の総合的調査研究会」が発足し、動植物、地学、漁業、農業経済、公園管理等広い分野の学際的な協力によって、知床国立公園の生態系を全体として把握する方向が打ち出されたのは注目すべきであろう。

この問題を昨夏、米国旅行中、友人に話したところ、彼からその後送られた資料によると、ワシントン州からオレゴン州にかけてのカスケード山脈にいるニシアメリカフクロウが二千つがいに減少したので、その保護のために四万八千ヘクタールの森林を保護したい、とわが国の林野庁にあたるフォレスト・サービスが言い出した。このため、三千～七千五百億円の木材収入がフイになると、木材業者が大反対をしている、という。問題は知床と同じだが、行政と国民の立場が知床とは逆で、米国ではフォレスト・サービスが環境保全に強い指導力を発揮していることはまことに羨しい。わが林野庁も、今後は森林をエコシステムの一部として保存することを真剣に考えていただきたい。

これほどに盛上った国民的反対を押し切って伐採を強行しても、林野庁には決してプラスにならない。むしろここらで一歩後退した

日本列島縦断徒歩の旅

中保

人々のあたたかい心と、自然の恩恵により、日本列島縦断の旅、百八十日間で約三千二百粁の旅が徒歩によってできた。

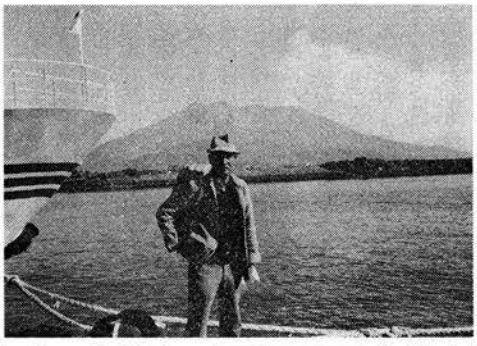
私は、かねてから、還暦を機に、大いなる夢を見ていた。それが日本縦断の旅であった。

昭和六十一年六月一日、計画を実行した。六月は、初夏とはいえまだ肌寒い。羽田から飛行機で最北の稚内にとんだ。そして、稚内の野寒布岬から歩きはじめた。

北海道約六百粁を二ヵ月の予定で、日本海に沿って歩く。稚内、天塩、留萌、そして、いまだ秘境の地といわれる増毛から雄冬の海岸を通り、石狩にでた。そして、札幌に八月二十日についた。一旦、日本海をはなれ、定山渓に入り、中山峠をこえ、洞爺湖から長万部に着き函館に出た。はじめの予定より二十日程早い。北海道の踏破で、大いに自信を持った。

心をひきしめて、青函連絡船で海を渡った。青森からは中央部の浪岡より大鰐、大館に出て、東能代に向った。そして、日本海に沿って歩くことができた。七月二十日には、干拓地で有名な、八郎潟を通り秋田市へ。八月十五日には酒田、笹川流を通り新潟市につくことができた。八月三十一日には昔も今も最大の難所、親不知を抜けることができた。九月十日頃は、金沢から弁慶の勧進帳で有名な、安宅の関を抜け片山津温泉に出て、海をはなれ福井に出た。そして禅宗の本山永平寺に参詣。武生からは昔の軍港舞鶴港へ、さらに山椒大夫の由良、日本三景の天の橋立を通り但島の海岸に出た。列車事故で問題になった東洋一の余部鉄橋を見て鳥取の砂丘に出る。そして、貝がら節の浜村温泉にとまり、宍道湖畔の松江から静かな町、益田にでて、日本一小さい競馬場を見たり、雪舟の庭園で心をいやし、山口県にはいった。

十一月五日、私の誕生日には、下関の火の山、海関荘で一人で祝う。あと九州の四百粁をのこすところまで歩いた。関門トンネルを渡り、小倉から博多にで、さらに久留米から白秋の柳川で川下りを楽しみ、大牟田から玉名、八代を通って水俣に出た。出水から鹿児島だ。鶴の大群を見学し、十二月一日、鹿児島の海に出て、桜島をゆっくり仰ぎ、私の長い旅は終った。



木暮理太郎翁碑前懇親会の報告と予告

第二十四回木暮翁碑前懇親会は昨年五月十七日、山梨県須玉町金山で碑前祭と懇親会、翌日記念山行を開催した。

集まる者六十二名、近来になく盛会であった。だんだん故人を知る人が少くなるのは淋しい

方が世論の支持を得られ、ここで自然保護団体側との協力関係も生れ、大局的に見た林野庁の発展の可能性につながってゆくであろう。林野庁がそのような賢明な道を探して進まれることを切に希望したい。

なお日本山岳会内には自然保護委員会があって重要な諸問題について検討を行なってこられたが、この問題についても見解をまとめ、適切な提案や助言をいただければありがたい。

（北海道自然保護協会会長）

・報告・

熊本支部
新年晩餐会

熊本支部恒例の新年晩餐会は、一月十日（土）午後六時から、熊本市内のレストラン「ホルン山小屋」で開催、西沢支部長始め二十名が出席し盛大に行なわれた。

先ず西沢支部長の挨拶、会務報告があり、続いて、支部一番の酒豪河上会員の音頭で乾盃、晩餐となった。フランス料理と飲み放題のアルコールを前に、久し振りに再会した会員の近況、山行など話題は尽きず、テーブルを移動しながら歓談。宴たけなわ、昨年十一月マナスルトレッキングに参加した河上会員、年末から年始にかけてアフリカの山で楽しんだ本田会員の海外遠征組が山行中の話を披露、一同をうらやましがらせた。

また、会場には、昨年十一月逝去された三谷孝一前支部長の奥様もみえられ、想い出話に故人を偲んだ。最後に支部の一層の発展を祈って、一同万歳三唱にて散会。

例によって二次会、三次会へと新春の街に散っていった。

出席者 奥野正亥、西沢健一、馬場猛、宮崎豊喜、石井久夫、本田誠也、多田隆峰、田上敏行、工藤文昭、菊池更生、門脇愛子、桶口格、河上洋子、中村誓紀、三谷ヌイ、馬場千代子、大木野マツ子、内田晴子、樋口洋子、前田辰男

（田上敏行）

真狩スキー合宿
北海道支部

昨年に続く支部スキー合宿が三月七日（土）、八日（日）の両日、後方羊蹄山南山麓の真狩村山丈荘で行なわれた。

この集いに参加したのは、橋本支部長以下十九名、遠く名古屋より馳せ参じた三ツ石さん、函館の四人、佐々前会長ご夫妻等で、車九台が山丈荘前に並ぶ。午後五時より支部委員会では、六十二年度事業、支部役員推薦、支部20周年記念等の議題で熱心な討議が行なわれた。

午後六時、楽しい夕餉は、橋本支部長の音頭で乾盃、フランスパンに珍味をのせたカナッペ、塩漬け豚肉を煮込んだシチュウネンポトフ、風呂ふき大根、豆腐田楽を肴に、バーボンウィスキー、ビール、清酒、下町のナポレオン等盛り沢山。十時を過ぎる頃には、音楽に合せダンスパーティ？ 乱痴気騒ぎとなる。古風な鉄兜に身を固めた勇しい橋本支部長に、ヤンヤの喝采が沸き起る。

翌八日は、ホットサンドや、モズク雑炊で小薩張りと朝食後、貫別山スキーツアーに、札幌へ真直ぐ帰る組、倶知安、余市を廻って七時間がかりのドライブと、各々限りだが島田巽名誉会員、山崎金次郎永年会員など、お元気な姿を見せていただきありがたいことであった。

碑前祭を終り、有井館別館を借りきっての懇親会。堀口丈夫料理長の下、今井洋地、山本稔、篠原健夫、石垣政雄、平井和雄、小林基子、前田清子、里見清子、岡部みち子、金山陽子の各氏が腕をふるった山菜料理の山。毎度のことだが、三井松男前支部長家からは高価な「煮貝」、岡谷の小林啓助氏からは「御柱」とネーミングされた七年に一度しかつくられない秘酒、今沢寛氏からはにごり酒のさし入れがあった。

飲むも飲んだり、清酒一斗八升、ビール二ダース、ワイン三升、ウィスキー一升。初参加の沼津かもしかのパーティの十五分毎の乾杯の音頭だから無理もない。

有井館心つくしのそばでお開きとなり、あとは前庭のたき火を囲んで、いわなの骨酒で二次会。

かくて翌朝、沼津の面々は朝飯前に、五里山を一つ登って来た。八時、本隊は、長駆御坂山塊の釈迦ヶ岳へ。芦川の源流近くに車をとめて頂上へ。北に奥秩父。西に南アルプス。南は富士山。ちようど種まき小僧の雪形が出ていた。

頂上には思いもかけず大森久雄氏が待っていた。ワインの栓が抜かれ、下から持参したヒヤムギは大好評。

かえりは、府駒山の稜線をたどり、黒岳とのコルから車で鎌倉往還に出て、石和、甲府へと流れ解散、記念山行を終った。

＊

本年は次の要領で実施する。

日時 五月十六日（土）、十七日

場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山

宿泊 右同、有井館

TEL. 0551 45 0455

交通 中央線韮崎駅下車、バス増富ラジウム温泉行終点下車徒歩一時間半（タクシーの便あり）

行事 1、碑前祭十六時より。本年は二十五回記念として、佐々保雄前会長の記念講演あり（蔵王の清渓小屋の看板を最初に書いたのは木暮氏、二代目を佐々氏が書いた。木暮氏は同氏のJAC入会時の紹介者であった）

2、十八時より、有井館にて山菜料理による懇親会

3、記念山行は、御坂山塊西端の蛾ヶ岳（一二七九・六メートル）四尾連湖まで車、あと徒歩二時間、（地図、五万甲府、二・五万市川大門）

会費 一泊二食、山行交通費、記念品代共、一人八千円

申込 〒400 甲府市武田三―六―二七 山村正光 TEL. 0552 51 3175

締切 五月十日、定員五十名

石井鶴三展
―生誕百年記念―

▽四月八日（水）～五月十日（日）
山梨県立美術館（甲府市）

▽六月二十七日（土）～八月九日（日）
三重県立美術館（津市）

の対応で合宿を終えた。

参加者　久保田優一、桜井仁、三浦勝幸、石崎貞子、高橋邦臣、中島英彦、藤野和男、亀井秀子、川越晧充、佐々保雄、佐々喜久枝、横田春雄、柳田凉子、沼崎勝洋、橋本誠二、平野明、河村章人、河村皆子、三ツ石清、新妻徹

（平野　明）

京都支部だより

自然保護集会

燃えるような紅葉の、去る十一月八、九日、京都北山にある京大芦生演習林において、自然に親しむ集会を開きましたところ、東京や岐阜からもお出でになり、子供五人を含めて総勢六十五名の参加がありました。夕暮れどきよりこの演習林の中心にある長治谷小屋の前庭で、牛のモモ肉の丸焼き（五十キロ）パーティが始まり今西錦司元会長や会員番号一四八四の谷博さんを交えて、夜おそくまで懇親を深めました。

翌日は吉村健次郎さんより、芦生演習林の概要と現状のお話を伺い、その後三班に別れて行動しました。A班は野田畑峠へのキノコ狩り、B班は杉尾峠のブナ・スギ原生林の見学、C班は近江・若狭・丹波の国境にある三国峠の三角点への散策でした。

前日より晴天に恵まれていたのが解散時の二時頃より雨となりましたが、支部発足以来、始めての大きな集いは楽しく行なわれ、有意義な二日間であったと思います。

参加者（順不同）　朝倉英子、荒木眞弓、荒野康子、今西錦司、岩坪五郎、岩坪レイ子、永井久江、竹内盛正、上原泰行、遠藤克昭、岡田茂久、大西康郎、賀嶋増造、久我良房、久我文子、小林直人、桝谷、田中、有吉、長谷川、大塚、斎藤惇生、斎藤清明、斎藤麻理子、斎藤まりか、斎藤かほり、坂井久光、坂本公一、四手井靖彦、宇治日出二郎、宇治美津子、宇治なると、杉山イタル、梅村重和、須藤建志、関本俊雄、高島法男、清水一男、田中節子、谷博、高木志茂子、広瀬幸子、高木基揚、塚本幸子、安川恵美子、西川顕、伏見碩二、伏見紀子、伏見耕太郎、伏見雪子、須田静子、幣内規男、薬師義美、山口克、山根猛、横田明男、吉村健次郎、小野季子、吉村比佐、水野美代子、水

サマ部落からのパンプーチン

垂井町にある播隆上人名号軸

石坂久忠

西高東低の気圧配置をしりながら岐阜県不破郡垂井町に向った。垂井町は二十㌢の新雪があったとかで除雪も充分でなく難儀した。

垂井町に播隆上人の名号軸があることを知ったのは不図したことからであった。早急に尋ねたいと考えていたが機会を逸してから幾歳月が経ってしまっていた。

名号軸のある家が高橋家と聞いていたが、近くの老人に聞いてみても判然としなかった。そこで、垂井町の寺をたずね情報を得ようと考え寺へ急いだ。

山門には徳法寺とあった。住職は桐山　悟氏で、幸いにも播隆上人の研究者であることが話しの内容から伺いしることができた。

名号軸のある家は石黒敬喜氏宅である、と教えられ、先代は物故されているが行ってみなさい、と云うことで早速石黒氏宅へ急いだ。

敬喜氏は勤めから帰られたところで、訪問の用件を話すと心よく承知下された。

播隆上人の「濃州一宮南宮奥院山籠記」に「我ハ濃州不破郡宮代邑ノ農夫某ナリト申サレ候聞テ、我不思議ノ思ヘニ、拙老モ去年其辺巡在ノ時、初縁ノ人ニ誘引セラレテ、其地一宮南宮ノ社、并奥院山上迄参詣シ、扨テ其霊場ノ景色夕ニシキ名山ト拝見シタル由ヲ物語リシ暮テ、別レニ臨テ後会モ計ガタク思ケレバ、甚ダ床ケ敷申居ラシ、我モ飛州ノ方ヘイソギケレバ、其場ヲ別レヌルモ、又同年ノ穐(秋)末ニイタリテ、城劦ヘ帰リニ垂井宿ノ元泊シ、宿ヘ立ヨレバ、宮代ノ人両三度モ御皈リノホドヲ待チ居ラレ候ト咄シノ中ヘ、如何ナル因縁モ有リケルニ、又來テ御皈モアレカシト待居タル故、当山防所ヘエモ咄ヲキタリト厚志ニ申セシ故、我モ其御山ヘ勤籠ノ志願ヲ頼ミ、許容ノ事速ニ相済ミ、山上ノ別当所ノ坊舎ニ錫ヲ挂テ、其麓ナル御本社山上、高山大権現ノ御本地仏ヲ尋タテマツルニ、弥陀観音ノ化現トコソ、アラ有リガタキ、我ガ平生念ズル所ノ行業ノ怠リナカラン事ヲ祈リタテマツラント昼夜念仏三昧ニ入、或ハ信心アル人々ヘ念佛法間ヲ教化シ、（以下略ス）」とある如く、濃州宮代村の某なる農夫の勧めによって一宮南宮山上に参詣せしことと、垂井の宿で宮代の人々の厚意に因って南宮山へ勤籠志願を頼んだところ許容を得て山上の別当所の御坊に錫を止めた。とあるのをみても、農夫某は誰れであったのか、また、垂井の宿で待っていた人が誰れの某であったのか？　興味を抱く。

一説によれば、南宮神社の宮大工であった若山儀ヱ門との対話もあったようで、農夫某と共に宮大工某であったとすると南宮神社との繋がりも出てくる。宮大工による尽力によって播隆も一つの本願を達し得る助力となったと考えられる。

南宮山で両三度にわたり参籠した播隆であったが……。「濃州一宮南宮奥院山籠記」が文政七年の初秋から翌年の八年三月までの間の出来事であったとしたら、百余日の間、南宮山で山籠をしたことにもなる。

石黒家に保存されている播隆の名号軸は三幅になる。一軸は大軸で立派に表装され、他の二軸は小軸であった。その内の一軸は私のしる限りの中では異観な軸であった。それは蓮座の上に南無阿弥陀佛とある名号軸である。この二軸は永い生活と信心の香りがしみじみと染ってい

谷嘉宏、森茂明、森秀樹、森栄司、金子勲。

日本山岳会保管資料について

（横田明男）

山岳博物館を考える会

山岳博物館を考える会では総務と協力し、日本山岳会80周年を契機として、山岳に関する資料の収集や整備を行なって来た（会報494号）。これらの資料と、従来から本会が保有していた資料の凡てについて一応の整理が今回漸く完了し、保存を要する資料の備品番号取付けも終ったので、その結果をここにご報告する。

ただしこれら多数の資料を保管するには、本会のルームは余りに狭いので、一部は大町山岳博物館、松本アルプス博物館、あるいは秩父宮記念スポーツ博物館などに寄託することになった。そして同時に、本会側で回収の必要が生じたような場合には直ちに返して頂くという取決めも行なわれた。

一方、今後保管するに値しない資料や、貴重であるかも知れないが、たとえばいわれが不明でどこの山のものであるかわからない石といったあいまいな資料は、処分していくこととなった。その場合予め公示をして、改めて来歴を伺うとか、バザーを開いて希望者にゆずるなどの処置は講じてゆく計画である。

なお、山岳博物館を考える会では今後も引続き、山岳資料の収集、整理を行なってゆくが、特に今集めておかないと散逸したり埋もれたりするおそれのある品を優先させ、リスト作りもしてゆくつもりである。会員各位におかれても資料や情報の提供に何分のご協力を頂きたく、心からお願い申し上げる次第である。

そしてこれらの資料がやがて会員のみならず、広く一般の山岳愛好家、さらに外国の人々や後世の人々にとって極めて有意義な存在となり、山岳界の発展に貢献することを心から願うものである。

なお、今回作成された資料一覧表は、A、B、C、D、別表として会報に順次掲載する。

第十回　若葉会山行

—苗場山—

集会委員会

第十回目という記念すべき若葉会山行（旧山菜山行）は、六月十四、十五日の両日、苗場山を対象に行なわれた。

思えば、昭和五十二年の六月十一日、只見線入広瀬駅に程近い松屋旅館に、約六十名の参加者が集

表A　日本山岳会保管資料（1）

番号	品名（題名）	作者・撮影者・使用者・編集者	種類・大きさ	ヶ数	受入年月日	寄贈者
228	佐々保雄　肖像		額入写真	1		
229	西堀栄三郎 〃		〃	1		
230	城　数馬　〃		〃	1		
231	武田久吉　〃		〃	1		
232	高野鷹蔵　〃		〃	1		
233	高頭仁兵衛 〃		〃	1		
234	山川　黙　〃		〃	1		
235	梅沢親光　〃		〃	1		
236	横　有恒　〃		〃	1		
237	松方三郎　〃		〃	1		
238	別宮貞俊　〃		〃	1		
239	日高信六郎 〃		〃	1		
240	三田幸夫　〃		〃	1		
241	今西錦司　〃		〃	1		
427	信濃国全図	明治24年刊 21万6 千分1 酒井拾彦編	地形図	1	62.12.15	三田幸夫
428	参謀本部20万分1 地図　長野		地形図	1	〃	〃
429	〃　飯田		〃	1	〃	〃
430	〃　富山		〃	1	〃	〃
431	〃　高田		〃	1	〃	〃
432	〃　日光		〃	1	〃	〃
433	〃　宇都宮		〃	1	〃	〃
242	ｼｪﾝｸ ﾋﾟｯｸﾙ	横　有恒		1	60. 8.14	今西寿雄
244	ﾍｽﾃｰ ﾋﾟｯｸﾙ	高野鷹蔵		1	60. 8.14	浅山貞郎
247	2代目 ｳｲﾙｼｭ ﾋﾟｯｸﾙ	1925 三田幸夫隊	ｱﾙﾊﾟｰﾀ 謝礼	1		F Ayer & C Oberlin
249	ﾍﾞﾝﾄ ﾋﾟｯｸﾙ	浦松佐美太郎			57.10.	浦松佐美太郎
333	創立80周年記念 ﾋﾟｯｸﾙ	門田特製		1	61. 4. 1	
368	地図箱入 C	武田久吉		1箱		武田久吉
391	ﾏﾅｽﾙ頂上の石	1956. 5. 9 JAC 登山隊	台付	1	31. 6. 1	
392	ﾁｮﾓﾗﾝﾏ頂上の石	1960 JAC 登山隊	台付	1	55.	

播隆上人名号軸

大軸の裏面に次のような墨書があった。

萬德圓滿名、一切功德尊、現益一切人、得安（穏）快楽。

濃劦不破郡石手邑

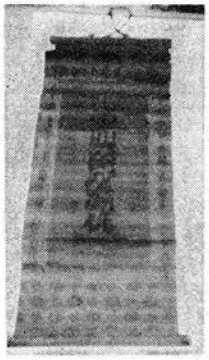
文政十丁亥年九月一日

石黒儀平治

石黒儀平治の父は法名を厳翁法仙沙弥（明和四年三月二十九日没（一七六七））母の法名は別山大峯信女（天明四年六月十七日没（一七八四））

名号軸の墨書から石黒儀平治が名号軸を奉受したのは播隆上人が槍ヶ岳登頂の前年に当ることを物語る。儀平治の没年は天明六年九月二十七日（一七八六）である。播隆によって得度したと伝えられている。

石黒家は元禅宗であった。菩提寺を禅僧寺といったと云うが（住職が名古屋方面に転じたため）現在は浄土真宗東本願寺派徳法寺の門徒となっている。



播隆上人筆名号軸

合したときが、この若葉会山行の始めである。

それ以来十年間、よくぞ続けていただけたと思う。

毎回数十名、ときには百名近い多数の参加者をかかえ、さぞかしと察せられる集会委員の方々のご苦労や、山行に先立っての勉強会も含めて、片岡先生を始めとする越後支部の皆様のご尽力には、本当に頭の下がる思いがする。何はともあれ、まずそうした方々に心から御礼を申し上げる。

さて、今回の山行は、十四日朝六時、越後湯沢駅頭に集合することに始まった。チャーターバスで直行というかたちをとらないのは久しぶりのことで、参加人員も多少は減るのではないかと考えていたのだが、今回もまた、例年通りの盛況である。ただ、この二、三年、ごく少数の方々を別にして、参加者の顔ぶれは大きく変ってきた。これは、表面に出ない部分での、若葉会山行の最も大きな変化のように思う。

集まったメンバーは、神楽ヶ峰、苗場山を経て秋山郷小赤沢に降るA班と、小赤沢に直行するグループに分かれ、A班はバスで、直行グループは乗用車に分乗して、それぞれに出発。

私ごとで恐縮ながら、私は小赤沢直行グループのほうに入れていただいた。こちらのグループに入ったのは、左膝の調子が思わしくなく、歩行に自信をもてなかったことにもよるが、その他にもう一つの理由があった。それは、苗場山に私が初めて登ったのがちょうど三十年前であり、その折、小赤沢経由のコースをとって以来、このコースからは苗場山に登っていないので、久かたぶりに、昔を振り返ってみたいという思いにかられたためである。

小赤沢直行グループは八時に秋山館着。朝食の後、苗場山登頂のB班と、片岡先生を中心に山麓で山菜研究に励むC班とに分かれた。

B班は越後支部の諏訪氏を先頭に、高沢夫人、山口氏、上野そして集会委員側から付き添いの中川、中沢両氏の計六名である。

苗場山の懐深く入り込んだ林道を、三十分余り車で走って、標高約千三百米の終点で下車。三合目の、ほんの僅か下の地点である。三十年前は、勿論このような林道は無かった。そういえば、大赤沢・小赤沢の集落にも、昔の面影はまったく見出せなかった。三十年という歳月の隔りの大きさを、今更のように感ずる。

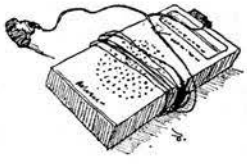
イワウチワの見事な群落を楽しみ、時折はタケノコなども採りながら、諏訪氏の心得たペースに恐れていた膝の痛みも出ることなく、最後の急坂にかかる。三十年前はすでにこのあたりで薄暮となり、単独行の心細さと時間に追われる焦りとから、べそをかかんばかりであったことが、ひどく懐しく思い出される。

十一時三十分、山頂台地の一角に出る。台地はまだほとんど残雪に覆われ、処々、雪の切れ目に木道がのぞいている。十二時山頂着。神楽ヶ峰経由のA班も、すでに半数近くが到着していた。

空は少々重いが、四粁四方に及ぶ山頂湿原の眺めを妨げるほどではなく、心ゆくまで展望を楽しむ。かつて、この湿原のほとんどを隈無く歩き廻り、大部分の池、うの水にも手を触れてみたものであったが、その池とうも、今は多くが雪の下に埋れている。

十三時、全員揃って山頂を後にし、十六時頃秋山館に帰着。

その夜は、旅館裏手の建物を拝借して、恒例の盛大な宴会。その中で、十年間にわたる若葉会山行の皆勤者・精勤者の表彰も行なわれた。いつもながらの、溢れるばかりの山菜料理、そして珍味栃餅、さらには庭での花火と、楽しい宴は夜遅くまで続いた。↖



表A　日本山岳会保管資料（2）

番号	品名（題名）	作者・撮影者・使用者・編集者	種類・大きさ	ヶ数	受入年月日	寄贈者
393	カンチェンジュンガ 主峰の石	1984. 5. 20. JAC 登山隊	台付	1	59. 7. 1	
395	第 2次 マナスル の石	JAC 登山隊		7箱	30.	
396	南極の石 1971	南極観測隊		2ヶ	46.	
397	南極の石 1985 A～E	南極観測隊		5ヶ	60.	
401	チョコリザ 頂上の石 Phyllie Stone	1985京大学士山岳会隊（藤平）	台付	1		
402	秩父宮記念 学術賞1970	JACエベレスト登山隊		1	47. 3. 3	
403	エベレスト 頂上の石	1970 JAC隊	台付	1		
420	マナスル頂上 ピース缶	山田　昇		1	61. 6.	山田　昇
421	マナスル登頂トロフィー（朝日賞）	1956 JAC隊			32. 1.16	
451	マッターホルン レリーフ	2万 5千分 1	台付	1	43. 3.	松方三郎
455	Tara女神像			1	45. 6.	Kurishna B.Verma
458	会員章送付証	河田　黙宛 別所梅之助宛	額入	1		
460	エベレスト 模型	KK日精	青銅製	1	50. 8.10	女子 エベレスト登山隊（田部井・麻生）
479	アイガー模型		ケース 入	1		
481	外国山岳会バッジ	26ヶ	額入	1		藤島敏男
511	上条嘉門次肖像	明治45. 7.27. 菊池弥一郎撮影	額入写真	1	54. 6.23	伴野　清
513	志賀重昂肖像		額入	1		
516	秩父宮妃殿下 短冊	マナスル登頂祝 勢津子妃殿下	額入	1		秩父宮家
525	ウェストン 夫人と嘉門次		パネル	1		
482	会員章証書			1		
483	IMF エベレスト 登山証明書			1		IMF
484	ナンダデヴィ		写真	1		
152	上高地の常さん		写真	1		初見一雄
195	カンチェンジュンガ		額入写真	1		
196	中性高山植物	（早大）山下一夫		1		山下一夫

434	松方三郎とディーレンファース		写真	1	61.12.10	坂倉登喜子
435	「ちゅん」	冠　松次郎	原稿（15枚）		〃	〃
436	「アルプスの父帰る」	藤木九三	原稿（7枚）		〃	〃
133	天馬像		青銅製	1		中国登山協会
153	仏陀像		黄銅製	1		ネパール登山協会
123	田代池の白樺	中村清太郎	油絵変形6	1		
124	群猿	石井鶴三	墨絵	1		
126	針ノ木峠より	茨木猪之吉	油絵10号	1		
128	初冬の両神山	茨木猪之吉	油絵10号	1		
129	ブカヒルカ・ノルテ	渡辺九郎	水彩画	1		
130	鳥	石井鶴三「山岳」	50周年表紙原画			
			墨絵	1		
131	メール・ド・グラス			1		
134	カンチェンジュンガ 1835	Herman de Schlagintweit	プリント絵	1		松方三郎
135	Jungfrau 1966	山里寿男	油絵	1	42. 8.	山里寿男
137	小島烏水レリーフ		銅板	1		
138	北穂高岳主峰	足立源一郎	油絵25号	1	48. 5.	足立　朗
139	或朝の槍ヶ岳	足立源一郎	油絵25号	1	48. 5.	足立　朗
140	槍ヶ岳初夏	中村清太郎		1	43. 4.	中村清太郎氏遺族
141	雷　鳥	剝製　2 羽	ガラスケース入	1		
142	北穂高岳滝谷	足立源一郎	油絵25号	1	43.12.	足立源一郎
143	槍ヶ岳	〃	油絵p8号	1	48. 5.	足立　朗
144	カンチェンジュンガ	矢崎千代二	パステル画	1		
147	W・ウェストン 胸像	佐藤久一朗	壁掛	1		
181	ジョージ・エベレスト肖像		額入写真	1		
182	小島烏水肖像		〃	1		
183	木暮理太郎肖像		〃	1		
185	ウェストンの有明登山	石田吟松スケッチの	複写写真 4葉			
			額入写真	1	60.10. 1	高山忠四朗
186	秩父宮殿下 マッターホルン	モノクロ 2葉	〃	1	55. 8.	秩父宮家
187	秩父宮殿下 ヨーロッパアルプス	モノクロ 2葉	〃	1	55. 8.	〃
188	ウェストンと嘉門次（河童橋）	モノクロ　大木　操	〃	1	52.10.	大木　操
189	清水屋と焼岳（大正池生成以前）（大正6年）	モノクロ　大木　操	額入写真	1	52.10.	大木　操
226	JAC 設立趣意書		額入	1		
227	チョモランマ北壁		パネル 写真	1		

明けて十五日は、若葉会山行を一応解散とした後、希望者による小松原湿原散策。前日にも増して好天に恵まれ、のどかな散策となった。残念ながら花期にはまだ早いためか、湿原は乾燥気味で、花の姿もほとんど見受けられなかった。しかし、この湿原は、以前から地図を眺めるたびにいつかは訪れたいと願っていた地であっただけに、私としては大満足であった。

沢のほとりで、粟飯とタケノコの味噌汁を御馳走になった後、再びバスの人となり、越後湯沢駅に戻って解散となった。

参加者　大塚博美、片岡　博、松本英一、諏訪　武、室賀輝男、田村宏明、児島弘昌、中尾正武、小林孝次、秋山光男、中島信一、愛　利三、平野しん市、内山修一、赤松　光、大塚玲子、川上光久、澤田周平、飯島正章、平岡誠一郎、板谷つねお、継松義彰、最上猛夫、小松原恵子、川　朋子、森　唯正、清水裕子、滝　正子、阿部隆子、久保シノ子、大友裕美、井上久子、大西久志、鈴木幹子、長田真澄、相山紀明、佐久間正子、林　一枝、広中美代子、三ッ石　清、斉藤健治、岩堀瑞子、福久米之助、松永紀孝、中村太郎、井上　繁、井上栄子、小松原一朗、斉藤直信、岩佐邦彦、高澤英雄、高澤佐恵子、吉田　実、山崎　健、松井美恵子、富田邦夫、内山　城、原　謙一、中村久美子、高田真哉、市川義輝、市川佐江子、早川英夫、山崎幸和、遠田　栄、遠田篤子、上野英世、上野　操、石間信夫、堀田典郷、山口　暁、長嶋正浩、宮地守郎、井野千枝子、小川ゆき子、佐藤淳子、土岐富美江、広羽　清、新井陽一郎、中川　武、菅原広男、継松久美男、沢木由美子、藤田礼子、尾崎陽子、嶋崎直忠、佐藤皆子、中台利枝、

（上野英世）

会務報告

二月理事会

2月12日午後6時30分
場所　本会ルーム

出席者　今西会長、山田、大塚副会長、鴫原、橋本、大橋、松永、浜口、梅野、高遠、鈴木、太田、平井、関塚各理事、山本監事、松田、宮下、中村、山口各評議員、尾上東海支部長

委任　岡沢、絹川、大森各理事

審議事項

◎三国合同登山の会員募金について　会員に募金協力依頼することについて　了承

◎日本山岳会学生部クスム・カングール登山について　了承

報告事項

◎三国合同登山関係　二月二十四日に議定書調印式が北京で行なわれた。

三月三日より登山事務所を開設（神田橋）

◎各委員会報告

▼三月十四日新入会員オリエンテーション

▼次回理事会で六十二年度事業計画・予算案を決定する。

▼本会の備品を整理し、一部の資料、物品を一月末に松本と大町の博物館に寄託した。

▼定期刊行物の製本実施。

・六十一年度会員総会は五月二十二日（金）午後六時より、私学会館にて開催される予定

ルーム目録

（2月）

3日　自然保護委員会
5日　図書委員会
6日　山研委員会
12日　三国実行委員会、理事会
14日　山岳図書を語る夕べ
16日　総務委員会
17日　自然保護委員会、婦人懇談会
18日　三水会
23日　フィルム委員会
24日　図書委員会、婦人懇談会
25日　科学委員会、海外委員会
26日　会報委員会

2月来室者361名

会員異動

退会

木村紀一（九四七〇）
井上　潤（六〇三〇）
荒谷一郎（五四一一）
上原博和（六四一一）
小出　清（八四五四）
蓑和新一（四〇九九）

☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

連続講演会

◉中央アジアを探検した探検家列伝（5回）

地理上の空白地といわれた中央アジアを探検した探検家列伝を5回にわたり、専門家に講義してもらいます。十九世紀後半から二十世紀初頭にかけてアジアの心臓部で活躍した探検家にスポットをあてみました。

なお講義は小冊子としてまとめ限定配布する予定です。

日時　①五月十二日（火）、午後七時～八時三十分まで、「レジナルド・C・F・ショーンバーグ」講師・広島三朗氏②五月十九日（火）「ニコライ・ミハイロヴィッチ・プルジェワルスキー」講師・田村俊介氏③五月二十七日（水）、「F・E・ヤングハズバンド」　講師・金子民雄氏④六月三日（水）、「大谷探検隊」講師・片山章雄氏⑤六月九日（火）、「趙爾豊」　講師・水野勉氏

会場　日本山岳会ルーム

会費　五回連続一、〇〇〇円（小

◉日本山岳会『会報』（一～一〇〇）合本

会員特別頒布について

本会では『会報』第一号～第一〇〇号、第一〇一号より第二〇〇号までの覆刻合本（二冊）の販売取扱いを致しております。

これは『覆刻日本の山岳名著』（昭和五十年）『新選覆刻日本の山岳名著』（昭和五十三年）の刊行にあたって、特別付録としてそえられたものです。

昭和五年より第三次マナスル隊の成功にいたるまで、本会の歴史をつたえる貴重な資料であります。頒布部数にかぎりがありますから、御希望の方は左記の要領にてルームあてお申しこみ下さい。　（図書委員会）

1　『会報』第一集

第一号～第一〇〇号　昭和五年十月より十五年十二月まで総索引つき　B5判上製函入八五二頁　頒価一二〇〇〇円

2　『会報』第二集

第一〇一号～第二〇〇号　昭和十六年一月より三十三年十一月まで　総索引つき　B5判上製函入一一六四頁　頒価一四〇〇〇円

3　会員特典と申込み方法

本会会員にかぎり左記の如く一割引にて頒布いたします。

第一集　一〇八〇〇円
第二集　一二六〇〇円
二冊合計　二三四〇〇円
（分売可）

お申込みは、二冊セット、第一集・第二集の別、希望冊数、住所・氏名・会員番号などを明記の上、現金をそえて日本山岳会事務局まで。現品の発送は事務局の指示にしたがって、版元（大修館）より直送いたします。

（送料は版元負担）

冊子製作の実費）

募集人員　先着二十五名のみ（電話受付け後、会員券を発送する）

申込先　日本山岳会事務局
Tel. 03-261-4433
海外委員会

＊

◉若葉会

山行案内

恒例となりました当山行、今回からは各支部の名山廻りとし、秋田支部の助言により秋田駒ケ岳に、宿は秘湯「鶴ノ湯」としまし

た。旬の山菜と地酒で楽しい会です。東京から参加の方にはバスの便を確保しました。各地の方は直接、山行・懇親会に参加下さい。

日時 五月二十二日～二十四日

コース 八合目→秋田駒ケ岳→湯森山→乳頭山→鶴ノ湯

集合 ①新宿スバルビル前 二十二日 午後十時 ②八合目小屋前午前七時

会費 懇親会・山行 一一、〇〇〇円 バス代 一六、〇〇〇円

申し込み 山岳会事務局へハガキか電話でお申し込みください。定員に達し次第締め切らせていただきます。

集会委員会

＊

◉山岳映画の会

日時 五月二十三日（土） 午後二時より

場所 本会ルーム

最近本会に寄贈頂いた左の二本の記録映画を上映し、終了後三田、風見両氏との懇談会を開く予定です。奮ってご参加下さい。

(1)三田幸夫氏寄贈

「エピック・オブ・エベレスト一九二四年」

英国第三次エベレスト登山隊の記録で、マロリー、アービンの活躍の様子も写っている。

(2)風見武秀氏撮影・寄贈

「ジュガール・ヒマラヤ一九五八年」

鮮やかな白黒画面に深田久弥氏・山川勇一郎氏等の活躍ぶりも録画されている。

フィルム委員会

＊

◉東北地区例会 ご案内

日時 六月六日（土）夕六時より懇親会 だしもの、アンデスの民俗音楽、ハープとケーナ、出演、アルフレッド本田（岩手支部）

場所 岩手県二戸郡安代町、田代平高原、七時雨山荘、立花幹雄気付、定員六十名 電話〇一九五―七二―二一〇三

山行 六月七日（日）七時雨山登山

会費 一万円、一泊三食付他、

※参加申込みは各支部で一括して五月二十日まで現金をそえ申込み下さい。なお東北地区在住会員を優先致します。

岩手支部

＊

◉火山についての講演会と探索山行

◎講演会

六十二年六月二十六日（金） 午後七時より、本会ルームにて

講師 気象庁地震火山部、澤田可洋氏

演題 火山の活動と火山災害―火山の観測と活動予知、山歩きの注意、その他

◎探索山行

六十二年七月十八日（土）―十九日（日）。

行き先 吾妻山群の吾妻小富士、一切経山の噴気地帯

講師 澤田可洋氏

探索現地講義＝火山観測の仕方、火山の表面現象、登山中に注意すべき前兆現象、その他

◇探索山行は六月二十六日までにハガキで、日本山岳会科学委員会あてお申込み下さい。

◇六十二年七月十八日（土）午前一〇・〇〇国鉄福島駅西出口（新幹線口）集合、マイクロバスで新野地温泉相模屋旅館へ。昼食後、鬼面山登山、相模屋泊。七月十九日（日） バスで浄土平へ。探索山行の後、路線バスで午後五時頃福島駅着、解散。

◇費用 十八日の昼食と十九日の昼弁当を含め、交通費別で凡そ九千円程度の見込み。

◇相模屋旅館は、〒九六〇―二一 福島市土湯温泉町野地二 ☎ 〇二四二―六四―三六二四

◇申込み後、とり消しは七月十一日までに願います。それ以後不参加の方は三千円お払い下さい。

科学研究委員会

＊

さんけん

◉上高地山研開所

今年の山研は四月二十六日（日）から開所しますが、開山祭が二十七日なので、バスが開通するのは二十七日です。

宿泊は素泊りが原則ですが、簡単な食事（味噌汁、漬け物、ご飯）を一食四百円で提供できます。申込みのとき申し添えること（山研 0263-95-2533）。

素敵な上高地の春を訪ね、憩いのひとときを、常連の会員、新入会員ともども持とうではありませんか。

予約は事務局でも受付けますが、取消しの場合は事前に連絡して下さい。

［利用料金］

会員	一、八〇〇円
非会員	二、八〇〇円
子供	一、〇〇〇円

山研委員会

＊

山岳と会報バックナンバー販売は三月三十一日をもって終了いたしました。一〇二件の購入希望があり、覆刻版五二冊、山岳一七六冊、会報一九四六部、総索引二三冊が販売できましたことをご報告いたします。

総務担当理事

会報用原稿募集について

会報500号で会報への寄稿をお願いしましたが、徹底しない部分もありますので、再度会報への寄稿をお願いします。

今まで会報に寄稿したことない会員のものは特に歓迎します。中身は山岳に関わるものであればどのような形式（紀行、報告、研究など）でもかまいませんが、長さは四百字詰原稿用紙で四枚くらいが限度です。四百字詰原稿用紙七枚分で会報の一ページが埋りますから、限度を超過する場合はその旨を申出て下さい。

会報編集委員会

昭和六十二年四月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 今西寿雄
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座 東京三―四八二九番
東京都港区六本木三ノ一ノ三〇 ABビル
印刷所 株式会社 技報堂